

(様式 2)

「秋田大学学生海外短期研修支援事業」実施報告書（企画・引率者用）

平成 25 年 3 月 13 日

所属・職名：秋田大学教育文化学部 国際コミュニケーション講座 教授
氏名：Emma Morita

研修期間：平成 25 年 2 月 27 日～平成 25 年 3 月 14 日

研修先：英文 Karoli Gaspar University Charles University in Prague
：和文 カーロリ・ガシュパル大学 カレル大学

○研修成果

申請時に提出した内容のとおり、参加者は院生 2 名と 4 年生 2 名のグループで、研修前には、チェコとハンガリーの歴史、特に共産党独裁下の社会主義国時代の出来事（ハンガリー動乱とプラハの春）と民主化後の社会・経済問題について学習した。したがって全員が共通の知識と課題を共有したチームとして活動できた。

活動は以下の 5 つに分類できる。

1：両大学での秋田大学生による英語と日本語両言語によるプレゼンテーションを数回行った。内容は、東北の祭り、秋田弁と庄内弁の言語学的特徴、日本の妖怪についてで、両大学の学生に対して初めてとなる東北文化の情報は興味深いものとなったようである。この観点では、秋田大学の宣伝活動も十分に成果があったと断言できる。そして、この数度のプレゼンテーション過程を通して、自己認識や成長度、並びにコミュニケーションのとり方と今後の課題が確認できたのは大きな成果の一つと言える。

2：ブダペスト JETRO 事務所を訪ね、その活動を学習し、両国の最新の社会・経済情報を得た。そのデータを基に、実際に学生がハンガリーとチェコの学生に対して、実態に則したデータであるか確認を行うなど、積極的な議論につなげコミュニケーション上の成果があがった。今後、もし秋田大学生がブダペストに来る時に、JETRO 開催のイベントなどがあれば、参加することは問題ないとの確認を得られた。

3：ハンガリーの国際交流基金を訪ね、その活動内容の説明を受け、海外での日本文化を広げる最前線の活動を観察できた。成果としては、自分自身が異文化社会とどのような関わりを持つべきか、新しい視点を学習できた。JETRO と同様、将来秋田大学生が来るときには、各種のボランティア活動を含め、国際交流基金にコンタクトを取れる確認を得た。

4：両大学の語学授業を実際に観察できた。特にカーロリ・ガシュパル大学では英語科の授業を実際に受講し、日本とは全く異なる概念で英語の授業が行われていることを実感できた。今回の参加した 3 名の学生は、今年の 4 月から英語教員になることが決定しているため、大変参考になり、かつ考えなければならない材料を得たという意味で、大きな成果があがった。

(様式2)

5：ほぼ毎日、両大学の学生同志が自主的に予定を決め、交流が活発に行えた。限られた時間を最大限度、有効に使うという観点で、自主的に交流を深めるために、自らがプランを決めるという積極性は、研修の大きな成果でもあった。

○研修全般にわたる感想

短期間という限られた期間内に最大限の成果を得るため、企画段階から、今回引率した学生たちに、明確な課題を与えていたが、その事前学習の重要性を再確認できた研修であった。この事前学習として講義を4回行い、研修中に会う両国の学生たちの間で、共有できる話題を提供していたことが、交流の深さにつながったものだと思う。

特に、カーロリ・ガシュパル大学の学生とは事前にe-mailを交換させ、学生同志の交流を始めさせていた。双方学生ともフェイスブック等のツールを最大限に活用していたようで、初対面の時からすでに知り合いのように、お互いがごく自然にコミュニケーションする様子には、大変驚かされた。

研修に参加した4名の学生中、3名が来月より英語教員として中学、高校で働くことが、決まっていた。そういう意味で、今回両大学で受講したヨーロッパの語学授業の進め方や考え方を、体験できる企画をしたことは、教師としての将来の活動に多大な影響を与えたものであった。そう思うのは、研修中に行った5度のリフレクション・ミーティング時において、日本の英語教育スタイルとは余りにも大きく異なることに、それぞれが深く考えさせられたというコメントがあったからである。今回の経験をどのように活かすかは、今後彼ら個人の取り組みとなるが、教師となる直前に、このような研修機会を組めたことは大変、有意義であった。

またJETROや国際交流基金などの組織と関係を築けたことは、将来もしカーロリ・ガシュパル大学と協定が結べれば、秋田大学生にとってもメリットが大きいものと予想される。たとえばJETRO主催のイベントでは日本企業との接点生まれ、その機会をどのように活かすかは、各々の学生の進路や興味によるものだが、少なくともそのような機会を提供できるという点では、非常に有意義だと思う。

いずれにしろ、今回のように、密度の高い短期研修を実施するためには、参加学生と事前に明確な問題意識を共有し、一つのチームとして活動することの重要性を改めて確認できた研修であった。